

テラ・メガラニカ

彬原希勇

地球^{ホシ}は未来へ……。

人類^{ヒト}は何処へ……。

■ 目次

序章	新緑の森の出来事	4
第一章	アジアの東	7
第二章	大陸の西	41
第三章	南の大地	80
第四章	何処へ：	122
終章	彼らに出来る事	152
	あとがき	158

序章 新緑の森の出来事

そこは、大地を覆う深い森の中である。夜明け色に染まる天空へと、真っ直ぐそそり立つ巨木の冬枯れた枝葉に、今、命の色が芽吹き始めていた。

季節は春、日付は十一月一日。この時期に新緑を迎える場所は、南半球だ。また、人間の開発に犯されない純粹無垢な大自然が、手厚く保護される場所でもあった。

春夏秋冬。何百種もの植物や動物が、繊細にダイナミックに変化する広大な原生林。

その大地を三百六十度の視界で見渡せる小高い岩山の頂上に、ひとりの男がいた。原生林東側の、小さな村の住民である。

芽吹く淡い緑の美しさ、そしてこの時刻は、原生林のあちこちに突起する大小幾つもの岩山が、燃えるような紅色に染まるのだ。

手にしたカメラのシャッターを夢中で押していた男は、まもなく最初の「異変」に気づく。風景を映すデジタルカメラの画面が、チラチラと横揺れするのだ。ふと方位計を見れば、針が猛烈な勢いで回っている。この原因はひとつだけ。しかし…。

「磁場の乱れか？ 妙だな。ここでそんなこと、今まで一度もなかったぞ」

異変発生後およそ30分。男は鼓膜が破れんばかりの轟音に両手で耳を塞ぎ、岩場へひれ伏した。飛

行機のエンジン音である。

この辺りは定期旅客便のコースだが、いつもは上空数千メートルを通過して行く。頭上僅か100メートル余りを掠め飛ばせば、自分の悲鳴すら聞こえない。さらに、猛烈な風圧。男は体を丸め、風圧で巻き上がる小石から身を守った。

巨大な機体がたちまち通り過ぎたあと、男は顔を上げその飛行機を見た。朝陽に映える銀色のボディ。小型のジェット旅客機である。目的地はここから約300キロ南の空港のはずが、どこへ向かうのか。超低空飛行で、西へ遠去かつて行く。

事件は、その直後に発生した。

まだ四つ這いの男がいる場所からおよそ500メートル西に、そそり立つ岩の壁が見えた。岩山ではない。地面が盛り上がったのか、それとも切れ落ちたのか。地層むき出しの高い岩壁である。

その最上部に、男の肉眼でもはっきり見える木が生えていた。たった一本。しかし、500メートル離れていても確認できる大きさである。その木が光った。突然、白く眩しく輝いたのだ。

直後、大地の底から響き渡る音。ドーンと何かが炸裂したような音と同時に、輝く木から、白い稲妻のような一本の光線が朝焼け色の空へ放たれた。そして、旅客機の尾翼を直撃したのだ。

偶発事故か、何者かの意図か？

旅客機は急速に降下し、岩壁の向こう側へ消えて行く。

「た…大変だ。墜落したぞ！」

立ち上がり叫ぶ男。しかし、凝視する岩壁の向こうから墜落音は聞こえず、火柱も確認できなかつ

た。ただ、彼の鼓膜を振るわせたエンジン音が消えただけ。まるで大地が旅客機を呑み込んだように、辺りは静かな早朝の風景に戻っていた。

男はしばらく呆然と立ち尽くすばかり。何が起きたのか。彼に理解できるはずもない。だが現実として、男は大地に轟く音を聞き、一瞬光った大木と、そこから放たれた青白い稲妻を見た。

やがてはつと我にかえった男は、岩山を駆け落ちるように駆け降りた。ここより西500メートル。旅客機が消えた岩壁辺りに、何があるかを知っていたのだ。音と光の発信源は、そこかもしれないと考えたのである。しかし、彼はその場所まで行けなかった。

原生林の曲がりくねった細道を、西へ向かい走り始めてまもなく。

男の足が止まった。前方、まだ夜の闇が漂う深い森林の中。こちらへ向かい歩いて来る人の姿を見たのだ。

子供だ。四く五歳の男の子である。こんな薄暗い森の中でたったひとり。おそらく迷子だろうが、実に可愛らしい少年だった。黄色いトレーナーにブルーデニムの半ズボン、足元は白いソックスと黄色いスニーカーを履いている。トレッキングの服装ではない。

しかも、様子が明らかに変だ。丸く大きな両眼の黒い瞳は朦朧とし、よろめきながら歩み寄り男にしがみついた。

男は片膝を付いた。それから、少年の小さな肩にそつと両手を乗せ、優しく話しかけるのだ。

「きみ、どこから来たの？ パパとママは？」

「…分からない」

「じゃ、きみの名前は？」

「忘れちゃった…」

俯く少年の真っ白い頬を、一筋伝い落ちる涙。細く小さな全身が小刻みに震え始め、一言呟いた。

「おうちに…帰る…」

そのまま気絶した身元不明の可愛い少年。両親も自分の名前すらも思い出せないこの子を、男はとりあえず村へ連れて行くことにした。

新緑の森で起きたこの出来事は、これから始まる物語の真髄である。
人類ヒトは何処へ…。壮大なテーマを語るドラマの幕が、今、上がった。

第一章 アジアの東

ここは秋真っ盛りだ。日本の東京都郊外、足立区でも埼玉県堺に近い丘陵地である。天空抜けるような秋空の青と、ポプラ並木の鮮やかな黄色のコントラストが美しい丘の上。市街地を見下ろす広大な敷地に、茶色い煉瓦壁の巨大な建物二棟が建っていた。東知大学の物理学部と工学部だ。

少し離れた丘の中腹には、高級マンション並みの学生寮を備えている。有名私立大学であり、また、このお洒落な学生寮が評判で毎年二千人以上が受験しても、夢叶う学生はほんのひと握りだ。そんな狭き門を突破し、現在ここで学ぶ若者は約800人。木立の秋色美しいキャンパスの中庭を行き交っていた。

日付は十月三十日。南半球で、旅客機の情報不明事件が発生する二日前である。

東知大学物理学部の建物一階のロビーフロアは、ここが学ぶ場所とは思えない空間だ。コーヒーやハンバーガーの有名なチェーン店があり、フィットネスクラブや美容室、ネイルサロンまで出店している。昼少し前の時刻、コーヒーショップのカウンターに座り、エスプレッソを啜るひとりの男性がいた。テカる紺色のブレザージャケット、胸元から覗く白いTシャツもよれよれで、ボトムは古着のダメージジーンズ姿だ。

名前を佐倉雄介という。現在二十六歳の大学院生だが、彼はキャンパス内でなかなかの有名人であった。その理由は、少なくとも容姿や性格ではない。卵型の顔面に、小さいが形の良い涼しげな両眼と高く通った鼻筋、平均的な唇が配置良く収まったルックスは、それなりのイケメンと表現できよう。だが、この程度ならばキャンパス内では埋もれてしまう。性格は、178センチ65キロの細身が雄弁に語っている。何が嫌いと問われれば、雄介は迷うことなく「運動」と答えるだろう。小学校から高校まで、体育の授業をどうさぼるか必死に考える毎日だった。

その分、勉強は大好き。物心ついた頃から本を読み、調べ思考し知識を養うことに、至極の喜びを感じてきたのだ。さらに持つて生まれた才能もあり、彼はその分野のエリートコースを進み現在に至る。在学中博士号を取得し、大学院生でありながら、この大学の研究チームのスタッフとして働いているのだ。しかしそれも、彼の名前を学生たちが知る理由ではない。

ならば何か。単純に記せば「親の七光り」だ。しかも半端ではない「七光り」が、時として雄介に未体験のプレッシャーを感じさせた。しかし…である。彼は今も、眩しく光り輝く父親を心から尊敬

し、誇りに思っている。

自分の人生の目標であり、そこへ導く唯一無二の師と信じ生きてきたのだ。その人生の節目が、来年春に迫っていた。大学院を卒業し、どう進むか。選択肢はふたつに限られ、どちらを選ぶかそろそろ決断の時期だった。優柔不断を絵に描いたような佐倉雄介の、現在最大の悩みである。それが二日後、遙か遠い南の地で発生する事故で一気に吹き飛ぶとは…。

この日、背中を丸めストローをくわえ、広げた本に集中する雄介の周りは、まだ平凡な日常の風景だった。

「よオ、准教授候補ナンバーワン！」

嫌味なほど明るい声に振り向けば、満面笑顔の男が立っていた。同じ研究チームのスタッフ仲間。それだけの関係だが、男は親友とでも思っているのか。やたら馴れ馴れしく雄介の肩を叩き、彼の右横に陣取った。そして、連れの女性ふたりに声をかける。

「そっちへ座れよ。こいつが今話した男さ。佐倉教授のひとり息子だよ」

「こんにちわア」

「初めましてエ」

雄介の背筋に一陣の寒気が走った。言葉の語尾を伸ばす話し方。これを、雄介は「あいうえお言葉」と名付けている。どう受け止めるかは相手の感性だろう。今、雄介の左側に座ったふたりのような全身女子高生が使えば、可愛いと感じる者も少なくない。ただし、雄介は背中が寒かったのだ。

だが、制服には見覚えがある。都内の有名な私立の進学高校だ。スタッフ仲間の男は「俺の奢り」

と前置きしてコーヒーを注文し、突然現れた「キラキラ女子高生」ふたりを紹介した。彼女たちの名前は、記す必要もない。雄介がコーヒーショップを出たあとは、もう忘れてしまうからだ。

「キャンパス見学に来たんだ。ふたりとも物理学部志望だぜ」

「へえ…」

「ホント、凄いですよお」

女子高生は少し興奮しているのだろうか。カウンターに身を乗り出して言った。

「お父様がノーベル賞候補になった有名な物理学者なんて。その息子さんも天才なんでしょう？」

「すでに博士号を持つてるぜ」と、スタッフ仲間。

「大学院卒業後もチームに残れば、即、准教授だな」

「すごおい！」

「十五歳までアメリカ西海岸で暮らしていたから、英語はペラペラ」

「もういいよ」

雄介は軽く右手を上げた。事実でも、彼の耳には男の見え透いたお世辞にしか聞こえなかったのだ。すっかりハイテンションな女子高生ふたりへ、クールな視線を向け話しかけた。

「きみたち、ぼくの父が何でノーベル賞候補に選ばれたか知ってるかい？」

「い…いいえ」

「それはまだ…」

「話してやれよ、田中」

「クールアンドドライは天才の条件か？」田中と呼ばれた男は、唇の隅を吊り上げて言った。

「地電流の流れを計算して、地磁気の強弱を予測する方程式を発明したのさ。佐倉シミュレーションと呼ばれる方程式だ。これが実用化されれば、磁気嵐の発生が前もって予測できる。すっげえ発明なんだぜ」

「……」

ハイな気分が一気に降下したようだ。女子高生たちの顔と体が固まった。それを横目で眺める雄介の口元が、ようやく綻んだ。

「きみたち、物理学部志望なんだろう？」

「はい」

「ちよつと説明してもいいけど、聞く気あるかな？」

「勿論です」

「お願いします」

彼女たちの背筋が伸び、瞳がキラキラ輝き始めた。意図的か無意識かは別としても、まだ純粋な向上心を感じる。雄介は、カウンターのバスケットに盛られていた菓子をひとつ手にした。形も大きさも、ピンポン玉のようなマシュマロ菓子である。

「父とぼくの専門は地球物理学。その中でも、地球電磁学と呼ばれる分野なんだ」

マシュマロ菓子里に、コーヒーカーップから引き抜いたストローを突き刺し貫通させ、女子高生たちの目前へ差し出した。